

[タイトル]

安藤正人教授退職講演^[1]

Prof. Masahito Ando Retirement Lecture

[著者]



安藤正人 | Masahito Ando

[キーワード]

| アーカイブズ学 | 地域社会史論 | 史料保存 | 阿波根昌鴻 | マイケル・クック |
Archival Science/Community Society History Theory/Recordkeeping/
Shoko Ahagon/Michael Cook

[要旨]

私がこれまでに学恩を受けた多くの方々の中から4人を選び、それらの方々の思い出を語ることで、私の「アーカイブズ学への道」を振り返ってみることにしたい。愛媛県松山での中学・高校時代に日本史を教わった島津豊幸先生は、授業で「地域社会史論」を熱く説き、私の目を歴史学に向けさせてくれた。大学の卒業論文でお世話になった山梨県大月の小林利久さんから、地域史料の大切さと、史料保存の実践について、多くを学んだ。非暴力の反戦平和運動で知られる沖縄県伊江島の阿波根昌鴻さんは、101年の生涯を通じて膨大な記録を残し、草の根のアーカイブズ活動が闘いを支える柱のひとつであることを教えてくれた。英国リバプール大学のマイケル・クック先生が強く示されてきた、アーカイブズは抑圧され差別された人々の権利や自由を守る大切な役割を持っているという考え方は、私の研究の土台となっている。

I wish to trace my own 'way to archival science' by talking about my memories of four persons selected among so many people from whom I have received tremendous academic benefits. Shimazu Toyoyuki-sensei, my teacher of Japanese history at junior-high and high schools in Matsuyama, Ehime Prefecture, often told us in his classes about 'community society history theory' enthusiastically, and opened my eyes toward history. From Kobayashi Toshihisa-san of Ohtsuki, Yamanashi Prefecture, who supported my preparing a university graduation thesis, I have learnt a lot about the importance of local archival records and how to preserve those records. Ahagon Shukou-san of Iyejima, Okinawa Prefecture, well known as a nonviolent anti-war peace activist, has left a huge amount of records created during his lifetime over a hundred years, and taught me that grassroots archival activity was one of the pillars supporting people's movements. Lastly, my present study on archival history has been influenced by Michael Cook-sensei of the University of Liverpool, United Kingdom, who has been strongly advocating the important role of archives to protect the right and freedom of oppressed and discriminated people.

ただいま、ご紹介に預かりました安藤です。今日はこんなに沢山の方々に来ていただきまして、身の引き締まる思いです。本来なら、大学を退職する教師は、最終講義ということできちんとした締めくくりの講義を行う慣例があるようですが、私の場合は、残念ながら定年まであと5年を残しての身体の不調による早期退職なので、あまりおめでとうと言っただけのような立場ではありません。それで、最終講義というかたちは遠慮させていただいて、退職講演とさせていただきます。ただ幸い、昨年12月に、学習院アーカイブズの方で、職員を中心とした皆さんにお話しする機会を設けていただきました。学習院アーカイブズ講演会です。そこにも随分たくさんの方々にお出でいただいたのですが、その講演記録が学習院アーカイブズのニュースレターの中に出ております。「現代社会におけるアーカイブズの役割」という題なのですが、うまい具合に、これが私の最終講義であったかなという気がします。この講演会のことをご存知なかった方には誠に失礼なことなのですが、今日、受付の所で配らせていただきましたので、最終講義はそれを読んでいただくということでご勘弁をいただきたいと思っております。そういうことなので、何かアーカイブズ学の私なりの集大成的な話でも聞けるのではないかと期待して来られた方がいらっしゃいましたら申し訳ありません。今日はそういう話ではありません。私の思い出話みたいなものにちょっと付き合ってください。こういうことになりますので、どうぞメモなど取る準備をしないで気軽に聞いていただきたい。後半の懇親の会でもご挨拶する機会があると思っておりますが、それにつながる長めの挨拶というふうなつもりでやらせていただきたいと思っております。

話に入る前に、ちょっと私の眼のことをお話しておきますと、今年35歳になる長男が小学校5年生ぐらいの時ですから、24年ほど前ですが、キャッチボールをしていた時に長男の投げた球が途中で消えるのですよ。グローブで球が取れなくて顔にボンと当たったりする。「お前、すごいなあ。魔球を投げるようになったんだなあ」と冗談を言ったりしましたが、何かおかしいなあ。それで眼科へ行ってみたところ、緑内障が進行していることがわかりました。それから、あちこちの病院で検査や治療を受けてきましたが、じわじわと悪くなって、ちょうど学習院大学に移った2008年に右眼の手術をして、2012年に左眼の手術をして、2014年に2回目の右眼手術をしました。それでも進行が止まらず、とくにこの数年は急速に悪くなっていて、授業を受けた皆さんはよくご存知の通り、ここ1、2年は、資料が読めない、自分の作ったレジュメも読めない、みんな学生のみなさんに順繰りに読んでもらうというふうな状況になって参りまして、これはどうも授業をやっていけないなということで、お許しをいただいて早目に辞めさせていただくことになりました。昨年の暮れくらいからは、眼の真ん中の辺りに視野狭窄が進んで来て、視力がどっと落ちてきています。最近、私の気に入っている言い方で言えば、目に見えて眼が見えなくなっているという、あまり笑えない冗談ではあるのですが、そんな状況です。今日も何人か、久しぶりにお会いしたみなさんにご挨拶いただきましたが、

1——本稿は、2017年3月25日に開催された「安藤正人教授退職講演会」での講演を原稿化したものである。なお、本講演ののち、本講演の内容に関わる筆者の談話が、座談会記録「日本におけるアーカイブズ学の発展」(「アーカイブズ学研究」No.27、2017年12月、34-60頁)、インタビュー記録「歴史学とアーカイブズ学の課題」(「歴史学研究」No.967、2018年2月、18-34頁)として刊行されたので参照していただければ幸いである。

どなたかちゃんと分からないということで、失礼をしています。次回、お会いした時には、もう本当にお顔が全く分からなくなるという可能性もありますので、今日は後の懇親会で、お一人お一人のお顔をしっかりと脳裏に刻んでいきたいなと思っております。そういうやや情けない状態ではありますけれども、以下本題に入ります。



図1——今治市のシンボル

さて今日は、これまでお世話になった方々は無数にいるわけですが、その中から1時間という短い時間ですから、4人の方をとり上げ、その方々の思い出を語りながら、私の「アーカイブズ学への道」みたいなことをお話したいと思います。その前に、小さいころの思い出話を少ししますと、私は1951年、昭和26年に愛媛県の今治市で生まれました。今治市のシンボルである、しまなみ海道、それから、パリーさん。パリーさんが頭に被っているのが、しまなみ海道の架け橋ですね。しまなみ海道は、尾道から今治まで、七つの橋で島々を結ぶ道の愛称ですが、

写真に映っているのは今治にいちばん近い来島海峡大橋で、世界初の三連吊り橋です。私、10年ぐらい前にジョギングでここを駆け抜けたことがあります。もちろん車道は走れませんが、歩道と自転車道があって、向かいの島まで往復しました。とても気持ちの良い橋ですから、ぜひ一度訪れてほしいと思います。

私が生まれた昭和26年は戦後6年目で、小学校に入った昭和30年代前半は、まだまだ四国の田舎にも戦争の傷跡が残っていました。駅前には傷痕軍人がたくさんいて、アコーディオンを弾きながら物乞いをしているというのが日常的な風景でした。自宅の前は遍路道なのですが、ほんの100メートルくらい近くに、四国八十八か所霊場55番札所の南光坊というお寺があって、毎日お遍路さんが行き交っておりました。八十八か所巡りという、今は一種のレジャーのように考えられていますが、私たちの子供の頃はまったく違っていました。皆さん松本清張の『砂の器』という小説と映画をご覧になったことがあるかと思いますが、あの中で主人公の父親がハンセン病に罹って、村を追われるというシーンがありますね。息子と二人で放浪と巡礼の旅に出る。お遍路さんというのは、そういう人たちが多かったんですね。病気、それから貧困、いろいろな理由で、今風に言えばホームレスになった人々が、四国八十八か所の巡礼に出る。とてもレジャーなんていうものではなくて、南光坊の広縁の床下には、遍路宿に泊まれない貧しい人たちが、半ば住むようになって、いつもたくさんおりました。中には子供も何人もいます。そういった人たちが、しょっちゅう私の家にもやってきて、物乞いをするわけです。私の父は優しい人でしたけど、あまりに度々なので、最後には「帰れ」みたいなことを言うと、子供が玄関の戸を外から蹴ったりする。私は昔からけっこう正義漢だったものだから、親父に「何で追い返すんだ」と食ってかかった覚えがあります。そういう雰囲気の中で小さい時代を過ごしたことが、ひょっとすると、今の私に何ら

かの影響を与えているような気もしないではありません。

それから、小学校時代、私はけっこう科学少年でした。これは父の影響もあります。父は、戦時中は工業専門学校の教員で、理数科を教えていました。そのおかげで招集もほとんど形ばかり、戦地にも送られずすぐに帰されたようです。戦後は少し親戚の会社を手伝った後、私が小学生のころ、自宅で中学生相手の学習塾を始めて、理科と数学を教えていました。今治には今治西高という進学校がありますが、西高に行くには安藤塾に行かなきゃならない、と言われて、けっこう有名な塾になりました。そういう親父の影響もあって、私は小学校時代ずいぶん理数系が好きでした。自慢話をふたつだけしますと、ひとつは小学校5年生のころ、エレクトロニクスと言うか電気が好きで、ちゃんと勉強したわけではないけれど、少年向けの科学雑誌みたいなものを読んだりしていました。ある時、ラジオの回路図を見ながら、ラジオというのは外から電波が来て、それを電気信号に変えてスピーカーから音が出る。これを逆にして、スピーカー側から声を入れると、ひょっとすると電波が飛んでいくんじゃないか。つまり無線送信機が作れるんじゃないかと自分で勝手に考えましてね。今でも覚えています、なけなしの小遣いをはたいて150円の小さなマイクロホンを通販販売で買ましてね、古いラジオを解体して、回路図を見ながらそのマイクロホンをラジオにつないで、いろいろいじくって、それでもう一つのラジオを少し離れた部屋に置いて、スイッチ入れてマイクに向かって声を上げたんです。すると受信機のラジオから私の声が大音響で流れて大成功。「やったな!」と思いましたが、子供心に、これは電波法に違反するのではないかと思って、一回ですぐに壊しました。父の忠告があったかもしれませんが。もうひとつは岩石や鉱物の収集です。今治の近くの西条に市之川鉱山という鉱山があったのですが、アンチモンの原料である輝安鉱の世界的な産地として知られています。とくに50センチを越すような巨大結晶が出るというので、世界の大きな博物館に市之川鉱山の輝安鉱が展示されています。この鉱山に、小学校5年生くらいだったでしょうか、理科部か何かで見学に行って、すっかり鉱物や岩石に取りつかれましたね。それから毎週のように土曜日、日曜日はハンマーを持って、今治近辺の山や川で、岩石採集・鉱物採集をやるようになりました。かなりいろいろなものを集めました。最後には道に落ちていた石ころを適当に拾って、「これは緑泥片岩」などと言えるくらい詳しくなりました。それで、「安藤君は岩石博士だ」と言われたりしました。その頃集めた岩石・鉱物コレクションが、今でも今治の実家にあるはず。もう数十年見ていませんが、記録物と違って劣化しませんので、今度帰省したら探してみようかなと考えています。

さて、ここでようやく4人の方々の話になりますが、1人目は、中学・高校の恩師で、島津豊幸先生といいます。私は、愛媛県の県都である松山市の愛光学園中学・高校という、6年間一貫教育の進学校に行きました。ここはカトリック系で、それなりに厳しい学校ではあったのですが、進学校にありがちな、ガリ勉ばかり

集まっているような固い学校ではなくて、むしろその逆でしたね。極めて自由奔放、やや無茶苦茶なところもありました。愛媛県は昔から保守県として知られていますが、1950年代の後半に、勤評闘争というのがありました。これは、学校教員の勤務評定に対する全国的な反対運動です。それから、60年代に入ると、学テ闘争、学力テスト反対闘争というのもありました。愛媛県教職員組合は、いずれもかなり果敢な闘いを行なったようですが、保守県政による切り崩しが極めて厳しく、愛媛県教組は数百人規模にまで減少させられたと言われています。その結果、愛媛の公立高校は、極めて保守的な雰囲気の中で教育が行われるようになり、公立高校にいられなくなった教員が、やむなく私立学校に移るといったことが、どうもあったらしいです。愛光学園にも、一人一人の先生に確かめたわけではありませんが、どうもそういうことじゃないかと思われるような、やや型破りの先生がけっこうおりました。一方で、スペイン系のカトリック校でしたから、スペイン人の神父や日本人の神父さんもいて、宗教の時間などもありました。今でも覚えているのは、中学1年の時でしたが、ある神父さんが宗教の時間に、人間は万物の霊長である、つまり万物のなかで一番優れた存在だという話をした。その時に、私の親友だった加藤和也君、彼は世界的な数学者になって、朝日賞や学士院賞恩賜賞を受け、今はシカゴ大学の教授ですが、彼が手を挙げてすくと立ち上がり、「神父さん何でそんなことが言えるのですか、それは人間の驕りではないのですか」みたいなことを言ったのです。僕らも尻馬にのって、そうだそうだと騒いでね。中学1年にして、そんな感じの学校でした。中学・高校の6年間、私は大半寮や下宿で生活したのですが、そのせいもあって、いろいろと親に言えない無茶なこともやりました。旧制高校的な雰囲気というか、それを気取るというところもあったように思います。そんな中学・高校時代だったのですが、父は実は医者になりたかったのに経済的な理由で諦めたらしく、私に医者になる夢を託して愛光に入れたようなところがありました。愛媛県は、とにかく医者が一番偉いという県で、高校の成績トップクラスはまず医学部に行く。国立の医学部がトップで、その次が私大の医学部。その次が防衛大学校か東大法学部。そういう所でした。私も、もともと理数系が好きだし、医者も悪くないとは思っていましたが、1960年代最後の3年間を高校生として過ごした時期に、ご存知のようにちょうど学生運動が全国的に盛り上がりました。社会のさまざまな矛盾に対する若者の反発が吹き出した、そういう時代だったわけですね。愛光学園でも、愛媛県の高校で唯一、生徒だけの自主卒業式をやったり、私も愛媛大学の何派だったか忘れましたが、学生デモに参加したりしました。私たちは丸刈りでしたから、高校生だとわからないように、みんな帽子をかぶったりして。そういった時期に私がいちばん大きな影響を受けたのが、島津豊幸先生だったような気がします。この写真は、愛光学園同窓会のホームページに出ているのを借用したのですが、島津先生は日本史の先生で、専門は日本近代史。とくに愛媛の自由民権運動の研究では第一人

者でした。『愛媛県の百年』など、著書や論文もたくさんあります。当時、愛媛大学に篠崎勝という教授がいたのですが、この先生は「地域社会史論」という考え方を提唱していました。そして、それを実践する拠点として、1953年に松山に「近代史文庫」という研究組織というか、運動組織というか。大変ユニークな団体が作られました。今も活動しています。近代史文庫の地域社会史論は、歴教協、歴史教育者協議会などによって全国的に広く知られるようになり、『岩波講座日本歴史』でもとりあげられています。近代史文庫が掲げるキャッチフレーズがありまして、「ここに生き、ここで働き、ここに学び、ここでたたかう」というものです。つまり地域に腰を据え、地域に根ざして、働き、学び、闘っている普通の人々こそが歴史の主体であるということです。そして歴史とくに地域社会史の研究は、専門の歴史研究者も重要だけれど、一番大切なのは、歴史の主体である地域住民が、自ら研究の主体にもならないといけないということ。これが地域社会史論のポイントなんです。実際、近代史文庫の会員は、主婦や学生や会社員が中心で、みんな身近なところに自分なりの研究テーマを持って発表し合うというような活動を長く続けています。島津先生は、近代史文庫を作り支えてきた中心メンバーの一人で、日本史の時間に地域社会史論の話をずいぶん聞かされました。先生の授業の素材は、たいてい当日の新聞であったり、先生が自分で作ってきた資料であったり、教科書はほとんど使わない。まあ進学校でもあるので、一応のことは勉強しましたがね。とにかく、歴史というものを地域から見ると、いかに面白かつ重要かということを、私は島津先生から教わったように思います。それでだんだん歴史学に興味を持つようになり、今でも思い出しますが、松山に坊ちゃん書房という古本屋があったのですが、そこに行って、『岩波講座日本歴史』の第2次シリーズ全23巻を買い込んで、読みもしないのに本棚に並べて、悦に入ったりしていました。結局、大学では親の期待を裏切って歴史を専攻することになったわけですが、1992年に松山で「記録史料保存に関する講演会」という会が開催され、そこで講演をした時、島津先生が来てくださって、本当に久しぶりにお会いしました。その時、先生が私に「安藤君がこういう仕事をやっていることは実に嬉しい。できれば早く愛媛に帰ってきてくれると、もっと嬉しい」とおっしゃったのを思い出します。そのご期待に応えられないまま、島津先生は2007年に亡くなられましたが、インターネットで検索したら、島津先生を慕う追悼文がまだ出ていました。本当にいい先生に巡り会ったなあ、と改めて感じているところです。

2人目に行きます。大学では、いろいろ紆余曲折ありましたが、日本史を専攻することになりました。東大は駒場から本郷に移る3年生の時から本格的に専門の勉強が始まるわけです。私は近世思想史の尾藤正英先生が指導教授だったのですが、思想史は私の肌に合わなくて、島津先生の影響でしょうか、農村を歩き回るような研究をしてみたい、と考えていました。幸いなことに、正規の授業ではないんだけど、東大史料編纂所の教授であった山口啓二先生を囲む、通



図2——島津豊幸先生

称山口ゼミという勉強会があって、私も参加していました。山口先生は当時山梨県大月市の『大月市史』近世編の監修担当だったので、1973年の夏休みに山口ゼミの学生院生を中心に、大月で史料調査を行いました。私が学部4年生の時です。そのとき主に調査したのが、現在もまだ続いているので多くの方がご存知の下花咲宿本陣星野家文書です。星野家文書の調査は、73年の夏に、2、3回山口先生と一緒に院生も皆で行きましたが、そのあと院生の皆さんはそれぞれ自分の研究がありますので全く来なくなりました。それで、あろうことか私がリーダーという立場になって、結局私たち学部生だけで星野家文書の調査を継続することになりました。1973年の10月から2年間、ほぼ毎週土曜日に、当時は特急じゃなくて、「急行かいじ」で大月に通って星野家文書の調査と目録作成を行いました。

図3 —— 星野家文書調査(1973)



この写真がその当時の写真で、左手前に映っているのが私です。私の後ろにいるのは、立教大学教授になった荒野泰典さん。私はこれをきっかけに、大月で卒業論文を書くということになりました。

そこで出会ったのが小林利久さん。私たちは「りきゆうさん」と呼んでいましたが、正確には「としひさ」でしょうね。次の写真の一番左の方です。ちなみに、その右にいるのが星野家のご当主、星野奇(くす)いさんです。現当主のおじさんに当たります。一番右は私で、この時は2度目の4年生でした。間にいるのは、後輩の東大国際史学科の学部3年生のみなさんです。ここには映っていませんが、現在国立歴史民俗博物館の館長をつとめている久留島浩君も、この時学部3年生で、中心メンバーの一人でした。小林利久さんは、大月史編纂委員会の事実上の編纂室長で、大月に根を張って地域の歴史を研究し、史料収集に全力を尽くす。そういう人でした。私は大月の史料で卒業論文を書くことになって、1974年

の夏休みのほぼ1ヶ月間、小林さんの家に下宿し、小林さんの後にくっついて、市内の旧家を訪ね歩くという経験をしました。小林さんという人は、写真を見ればなんとなくそういう感じが分かると思いますが、かなりユニークな人でした。日本共産党の熱心な活動家でもあり、地元の旧家のご主人などとは思想的にも性格的にも合わないのではないかと思われたのですが、意外にそうでもない。星野家当主の星野奇さんも、戦時中は大月翼賛壮年団長をやっていたわけですが、小林さんはそういう人ともいつの間にか親しくなってしまう。そんな不思議な力を持っていたね。私は小林さんと一緒に20軒か30軒の旧家を訪ねましたが、いろんなことを学びました。とにかく、小林さんは鼻が効く。この家はどうも古文書のにおいがする、というようなことを言って上がり込む。地元の人は小林さんを活動家だとよく知っていますから、敬遠されることも多かったと思いますが、何とか家にながらされても、いきなり史料を見せろみたいなことは言わない。最初は世間話とか、そのお宅の先祖の話なんかで終始して、何回目かの訪問の時にようやく大月市史のことを切り出すわけです。そして最後には、自分の家の蔵の中にある史料をぜひ見たい、という気持ちにさせる。いったん蔵の中に入ると、もう食いついて離さないという感じで、何回も何回も足を運んで、それこそ屋根裏から床下まで徹底的に探していましたね。そうやってたくさんの史料を掘り出したわけですが、一番の難関が実は星野家だったそうで、最初は何回も追い返され、それこそ何年も通い詰めてようやく史料を見せてもらえるようになったと言っていました。私たちが毎週のように星野家に通い、最後には、家人にも決して渡さなかったという文書箱の鍵を預けられるほど信用されるようになったのも、小林さんの長い努力があったおかげだったわけです。星野奇さんと富士五湖巡りをしたり、小林利久さんと富士山に登ったり、大月の調査には楽しい思い出がいっぱいあります。小林さんには、地域の史料に対する愛情というか、執念というか、そういう気持ちが大事なことを学びま



図4 — 小林利久さん(左端)

図5——甲州道中下花咲宿本陣星野家(小林久作)

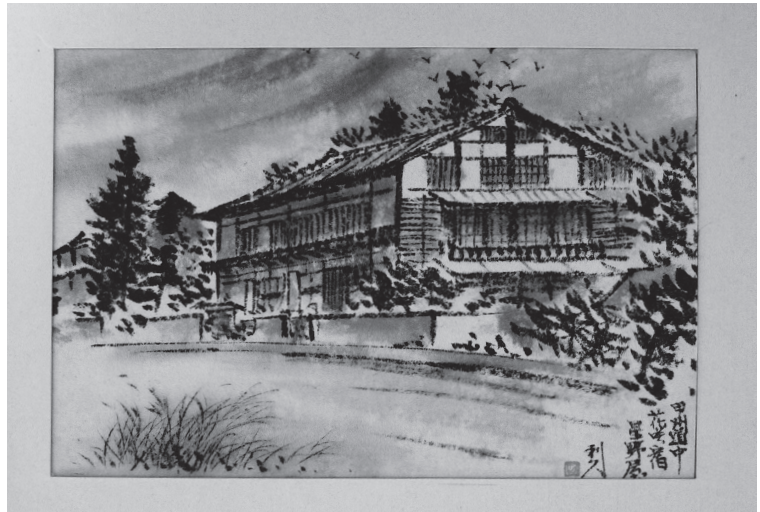


図6——阿波根昌鴻さん(張ヶ谷弘司「天国へのパスポート——ある日の阿波根昌鴻さん」、2015年、より)



図7——2冊の岩波新書



したが、ただ史料を見せてもらうだけでなく、史料の持ち主とともに地域の歴史を作っていくという、これはまさに島津先生から学んだ地域社会史論だと思うのですが、そういうことの大切さも教えてもらったような気がします。

小林さんは芸術家でもあって、版画や書が得意でした。すでに亡くなって久しいですが、毎年の年賀状は、地元の風景を題材にした版画で、みなさんの中にも小林さんの年賀状を楽しみにしていた方がいるんじゃないでしょうか。この版画は星野家の母屋で、重要文化財の本陣建築の様子がよくわかりますよね。小林さんは、銀座で個展をやったこともあります。

さて3人目は、沖縄県伊江島の阿波根昌鴻さんです。2002年3月に101歳で亡くなりましたが、アーカイブズ学専攻が出来た2008年に、1期生の皆さんと共に国内研修ということで沖縄を訪れたとき、ちょうど阿波根資料調査会が調査をやっていたので、それに合わせて伊江島に行き、阿波根さんが残した膨大な資料を見てもらいました。阿波根昌鴻さんをご存知でない方のために簡単に紹介すると、1955年に伊江島のほとんど全島が米軍基地として強制収用を受け、土地を取り上げられた農民たちは、「伊江島土地を守る会」を結成し、阿波根さんが会長になって、米軍に対する土地返還運動を展開します。やがて、土地問題だけではなく、基地そのもの、あるいは戦争そのものに反対する運動に発展し、阿波根さんは沖縄の反基地・反戦平和運動のシンボリックな存在になっていきます。

阿波根さんの闘いは、2冊の岩波新書で知られています。1冊は『米軍と農民－沖縄県伊江島－』（1973）、もう1冊は『命こそ宝－沖縄反戦の心－』（1992）。「命こそ宝」は沖縄弁でいうと「ヌチドゥタカラ」で、阿波根さんが作った資料館は「ヌチドゥタカラの家」と名付けられています。「伊江島土地を守る会」を中心とした長年の運動で、阿波根さんのもとには膨大な記録が残されました。この貴重な記録を何とか将来に残していこうと、2002年に私が代表になって阿波根昌鴻資料調査会を立ち上げました。そもそも私が阿波根さんのことを知ったのは、1993年に全史料協の会誌『記録と史料』の編集長として、沖縄県の大田昌秀知事(当時)にインタビューを行ったのが最初のきっかけです。『記録と史料』第4号に出ている「大田昌秀沖縄県知事に聞く－沖縄県公文書館の構想について－」がそれですが、その時に大田さんから、「伊江島というところに非暴力主義の反戦運動で知られる阿波根さんという人がいて、『沖縄のガンジー』と呼ばれている。この人は、とにかく貴重な記録を膨大に残している」と聞かされたのが最初です。その後かなり経った2001年10月に、私は初めて阿波根さんに会いに行っただけです。昨年亡くなった神奈川の石原一則さん、地元沖縄の久部良和子さんと宇根悦子さん、4人で伊江島に行って阿波根さんにお会いしました。阿波根さんは寝たきりで、すでに意識も朦朧としていましたが、私たちが来訪の目的を話し、「阿波根さんの大切な記録をちゃんと守っていきますからね」と声をかけると、「うんうん」と頷いてくれたような気がします。

図8 —— 第1回阿波根昌鴻資料調査
(2002年3月)



図9 —— 「乞食行進」(阿波根昌鴻「人間
の住んでいる島——沖縄・伊江島土地闘争の
記録写真記録」、1982年、より)



翌2002年3月に、阿波根昌鴻資料調査会の第1回調査を行いました。全国からアーカイブズや博物館の専門家を含む50人近いボランティアが集まってくれて、1週間くらい概要調査をやりました。ところがその調査が終わってわずか2週間後の3月21日、阿波根さんは意識が戻らないまま101年の生涯を閉じたのです。沖縄国際大学の石原昌家教授(当時)は、「琉球新報」に寄せた追悼文の中で、「奇しくも、氏の誕生日を挟んで、氏の人生の集大成ともいべき全資料の整理作業が『わびあいの里』で始まった。それには全国からその道の大家と若者が参集した。氏の播いた種が間違いなく若芽として育ち始めた時の、大往生であった。阿波根昌鴻氏は、安心して、喜んで旅立ったのである」と書いてくれました。以来すでに15年。阿波根さんのメッセージを未来に伝えようと、阿波根昌鴻資料調査会は、年2回の調査活動を続けております。

阿波根さんは非暴力の抵抗運動で知られた人ですが、とくに有名なのは50

年代に行われた「乞食行進」です。自分たちは土地を取り上げられてもう食べていけないと、乞食の恰好をして、7か月くらいかけて沖縄本島をデモ行進したわけです。この写真を見るとあまり乞食っぽく見えないかもしれませんが、他の写真にはものすごいボロを着た阿波根さんが写っています。私は江戸時代の百姓一揆の研究をしていたことがあります。江戸時代の百姓一揆にはボロや蓑笠を着るという慣習がありました。百姓は日常的に粗末な着物を着ていたと思いますが、一揆に参加するときは、「異形」、つまり、ふだんと違う乞食姿や蓑笠姿になって参加する。それが百姓一揆の一種の作法だったわけです。これは、いかに自分たちが貧しいかということを視覚的に訴えるということなんだろうと思いますが、それと同時に、「御百姓」としての一種の誇りというか、ボロを着ることによって自分たちが生きていく権利を世間に訴えるというような意味合いもあったのではないかと考えられています。そういう百姓一揆の伝統を、阿波根さんが知っていたかどうかはわかりません。おそらく偶然の一致だと思いますが、ボロを着て箆旗を掲げた「乞食行進」は、まさに現代の百姓一揆でした。

阿波根さんから学んだことはたくさんあります。今も学び続けていると言った方がいいでしょう。阿波根さんは、先ほど紹介した2冊の岩波新書も実は編集者がまとめた聞き書きで、自分で書いた著書や論文をほとんど残していません。その代り、いろいろなところに記録を実にたくさん残している。そのひとつが、この「爆弾日記」という題がつけられた闘争日記です。阿波根さんは、新聞の切り向きとか包装紙の裏とか、ありとあらゆる紙に短い文章や言葉をいろいろ書き込んでいて、調査はまったく気が抜けません。「爆弾日記」はむしろ例外的にまとまった記録と言ってよいと思いますが、表紙に「記録人阿波根」と書いてありますね。本人は多分、単に筆記者というくらいの簡単な気持ちで書いたのかもしれませんが、私には阿波根さんが自らを「記録する人」、いわばアーキビスト的な存在として主張しているように見えます。というのも、岩波新書にも出てきますが、阿波根さん

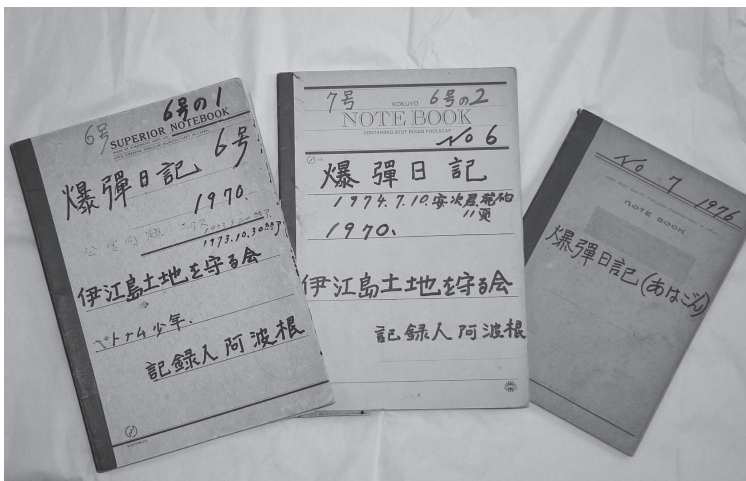


図10 — 「爆弾日記」

は日頃から記録の大切さを重く考えていたようで、米軍や琉球政府に対する陳情書は必ずカーボンコピーで複製を5部作り、皆で分散して持つ。それから、米軍との交渉は詳細なメモを取るだけでなく、当時高価だった外国製のカメラを数台買って写真を撮っています。これは、単に闘いの記録を後世に残すためだけではなくて、交渉で米軍当局が言ったことをちゃんと記録化し、後の交渉の際に証拠として示す、という意図があったようです。そういう意味でも、阿波根さんは、記録が大切なんだということを常に仰っていたらしい。ということで、「記録人」というネーミングには、非常に意識的なものを感じるわけです。そのような記録を重視した闘いが、今、細かく数えればおそらく5万、10万ではきかない歴大な記録群の残存につながっているのだと思います。

もうひとつは運動に対する阿波根さんの姿勢です。阿波根さんは、若い頃にキリスト教の洗礼を受けていますが、後には西田天香の京都一燈園で修業したり、中央労働学院で学んだり、さまざまな宗教や思想に接しています。阿波根さん自身は、そのどれかに傾倒するというのではなく、何か人間愛につながるものをみんな取り込んでいった人のように思います。「わびあいの里」にある阿波根さんの祭壇は、そんな阿波根さんを象徴するように、マリア像や仏像、支援者から贈られた千羽鶴などが雑然と置かれている不思議な空間です。「伊江島土地を守る会」には阿波根さんが作った「陳情規定」というものがあり、米軍と交渉するときには、大きな声を上げない、必ず座って話をする、手は耳より上に上げない、というようなことを決めていました。これも百姓一揆の「一揆契状」(盟約書)に似ていて、驚きます。「陳情規定」は、相手方に阿波根一派は暴力集団だというふうなことを言わせないためでもあったでしょうが、戦争屋に平和を教えるには、ひたすら彼らを導くように、諭すように、穏やかに話さなければならない、という信念から生まれたものでした。私も阿波根資料調査会に集う皆さんも、阿波根さんのそんな生きざまに惹かれて調査を続けています。本当は資料調査では資料をあまり熱心に読んではいけませんが、目録をとっていると、阿波根さんのいろいろな言葉が目飛び込んできます。短い言葉の中に光るものがある。阿波根資料調査会の楽しみのひとつは、夕刻のミーティングのときに、今日出会った阿波根さんの珠玉の言葉を皆で披露し合うことです。

4人目はマイケル・クック先生です。ここまでお話した3人の方はもう亡くなっていますが、マイケル・クック先生はご健在です。日本に何回か来られて、2006年に学習院大学で開催された「第2回アジア太平洋地域アーカイブズ学教育国際会議」にも参加されています。長くお会いしていないので心配していましたが、保坂さんが先月リパブルで会われて、まったくお変わりなくお元気だった、ということですので、安心しているところです。マイケル・クック先生は、皆さんご存知のように著名なアーカイブズ学者で、たくさん著作があります。とくにアーカイブズ記述論に関しては、イギリスの国内標準であるMAD(Manual of Archives



Description)の作成者であり、ICAの国際標準ISAD(G)についても、事実上の生みの親と言ってよいと思います。この写真は、2002年にリバプールのお宅に泊めていただいた時のものですが、私が先生に最初にお会いしたのは、これよりも20年くらい前、1984年のICAボン大会でした。この時のクック先生のお勧めもあって、1986年からイギリスに留学することになったわけです。本当はクック先生のいるリバプール大学で勉強したかったのですが、リバプール大学に入るにはラテン語必須だということで、結局ロンドン大学のユニバシティ・カレッジに行きました。以来、先生には何かとお世話になりましたが、2007年にロンドン大学に提出した私の博士論文も、実は学外審査者としてマイケル・クック先生が見ていただきました。ちなみに、ロンドン大学の学内審査者は、LSE(London School of Economics)のイアン・ニッシュ教授でした。日英関係史の著名な先生です。イギリスを代表するアーカイブズ学と歴史学の大家に審査をしていただいたことは、誠に光栄であったと思っています。

マイケル・クック先生は、アーカイブズ記述論やコンピュータ活用論など、どちらかというとアーカイブズの実践面での研究が広く知られていますが、その一方で、社会の中でどうやってアーカイブズを活かすか、とりわけ抑圧された人々や弱者の側に立って、アーカイブズをどう活用していくのか、という問題意識を強く持ってきた人だと思います。それがいちばん顕著に表れたのは、2003年にクック先生が中心になってリバプール大学で開催された「Political Pressure and the Archival Record(政治的抑圧とアーカイブズ記録)」という国際会議です。アーカイブズは行政の資源、為政者の道具という側面だけでなく、反面、抑圧された側、虐げられた人々、マイノリティにとっての権利の証拠でもある。そのような観点からアーカイブズを保存していくことが、アーキビストの極めて大切な任務である、というようなことを議論した国際会議でした。私も博士論文の構想の一端を

発表させていただきました。この国際会議の報告集が、私の業績一覧にも出ていますが、2005年にSAA米国アーキビスト協会から出版されています。

図12 — 第2回 ICHORA
(アムステルダム、2005年)



この写真は、2005年にアムステルダム大学で開催された第2回 ICHORAの時の写真です。マイケル・クックご夫妻と私たち夫婦が写っていますが、これを写してくれたのは、一緒に参加した保坂さんです。ICHORAというのは International Conference on the History of Records and Archives (記録とアーカイブズの歴史に関する国際会議)の略で、不定期で行われていて、とくに決まった主催団体があるわけではなく、手を挙げた人間が主催するというユニークな国際会議です。クック先生はこの会議の提唱者の一人だったと思います。この第2回 ICHORAでも、私は博士論文の草稿の一部を発表させていただきました。私はもともと日本近世史からアーカイブズ学に入ったわけですが、博士論文では第二次世界大戦期を中心としたアジアのアーカイブズ問題を取り上げました。正確な論文名は、業績一覧の2007年のところに出ています。日本語で言うところ「第二次世界大戦期ならびに戦後アジアの日本植民地・占領地における記録とアーカイブズの取扱いについて」ということですが、日本の植民地政府や軍政当局による記録の廃棄や流出の実態を解明しようとしたものです。このようなテーマに取り組む際に、マイケル・クック先生から学んだ、抑圧された人々のためのアーカイブズという視点が、私の研究の土台になったと思っています。

以上で、4人の方の話を終わります。ほかにも、山口啓二先生とか安澤秀一先生とか、学恩を受けた方々がたくさんいるので、本当はそういう方々についてもお話したいのですが、残念ながら今日は時間がありません。最後に写真を2枚だけ紹介したいと思います。



図13 — ロンドン大学ユニバシティ・カレッジ図書館・アーカイブズ・情報学大学院修了記念写真(1987年)

これはロンドン大学ユニバシティ・カレッジ図書館・アーカイブズ・情報学大学院の卒業写真で、1987年9月でしたかね。最前列右端に写っているのがジョーコ・ウトモ。後のインドネシア国立公文書館長です。同じく最前列左から2人目のスカーフを被っている女性がラハニ・ジャミール。彼女は後にマレーシア国立公文書館長になります。私は2列目の真ん中あたりにいます。



図14 — 第15回ICA大会(ウィーン、2004年)

この卒業写真から17年後、2004年に第15回ICA大会がウィーンで開催された時の写真が次の写真です。ジョーコとラハニには卒業後も何度か会っていましたが、この時はそれぞれインドネシア国立公文書館長、マレーシア国立公文書館長としての再会です。いちばん左にいるのはアタマンとって、やはりロンドンの同級生ですが、トルコのアンカラ大学のアーカイブズ学教授になっていました。卒業写真では、最後列左から2番目の毛むくじらの男です。ウィーンの写真に戻ると、私の左はアン・サーストン先生。ジョーコとラハニの間にいるのは

デイビッド・トーマス先生です。このお二人は、私たちがロンドン大学在学中に非常勤講師としてお世話になった先生方で、とくにアン・サーストン先生は「コンウェルズにおけるアーカイブズ史」という授業をされ、近現代アーカイブズ史の大切さと面白さを教わりました。現在もまだIRMT, International Records Management Trustという大きな組織の代表として活躍されています。デイビッド・トーマス先生は、数年前にイギリス国立公文書館のナンバー2の地位を定年退職されましたが、ロンドン大学では「アーカイブズ・マネジメント論」を担当され、アーカイブズ学の基本的な知識を学びました。

この2枚の写真の主役は、ジョーコ・ウトモトラハニ・ジャミールです。というのも、私が博士論文のテーマに戦争とアーカイブズの問題をとり上げる直接のきっかけを作ったのが、この二人だったからです。ご承知のように、インドネシアとマレーシアは、1942年から1945年までの3年半、ともに日本軍の軍政支配を受けるという経験を持っています。ところが、日本軍が敗戦時に多くの記録を焼却したために、国の歴史に深刻な空白が生じてしまった、ということなのです。そういう話を留学時代にずいぶん二人から、とくにジョーコから聞かされました。私は何も知らなかったので、黙って聞くばかりでしたが、日本に帰国して少し調べてみても、事実関係すらほとんど明らかになっていないことがわかりました。これが、アジアにおける戦争とアーカイブズの問題を研究テーマにしようと思った直接のきっかけなんです。博論は一応書いたとはいえ、研究はまだ途中です。退職して時間がきたら、少し力を入れて書き直したいと思っています。

締めくくりのご挨拶は第2部の懇親会で申し上げることにして、第1部の思い出話はこれくらいで終わりにしたいと思います。ありがとうございました。



安藤正人教授 略歴

Biography of Prof. Masahito Ando

- 1951年10月 愛媛県今治市に生まれる
- 1967年3月 愛光学園中学校卒業(松山市)
- 1970年3月 愛光学園高等学校卒業(同上)
- 1975年3月 東京大学文学部国史学科卒業
- 1977年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了(文学修士)
- 1977年4月 文部省大学共同利用機関 国文学研究資料館・史料館 助手
- 1986年6月 ブリティッシュ・カウンシル(英国政府文化部)給費留学生として
ロンドン大学ユニバシティ・カレッジ図書館・アーカイブズ・情報学大学院に留学
- 1987年9月 同上アーカイブズ学修士課程修了(Master of Arts — 1988年取得)
- 1990年4月 国文学研究資料館・史料館 助教授
- 1992年10月 国際アーカイブズ評議会(ICA)専門職教育部会(SAE)運営委員(2000年まで)
- 1998年4月 国文学研究資料館・史料館 教授
- 2000年4月 東京大学大学院・人文社会系研究科 教授 併任(2003年9月まで)
- 2003年4月 総合研究大学院大学・文化科学研究科 教授 併任(2008年3月まで)
- 2004年4月 人間文化研究機構 国文学研究資料館・アーカイブズ研究系 教授
- 2008年1月 ロンドン大学博士号(Ph.D.)取得(アーカイブズ学)
- 2008年3月 国文学研究資料館退職。同館名誉教授。
- 2008年4月 学習院大学大学院・人文科学研究科アーカイブズ学専攻 教授
- 2010年4月 日本アーカイブズ学会副会長(2016年4月まで)
- 2017年3月 学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻 退職

この間、一橋大学、お茶の水女子大学、早稲田大学、立教大学、学習院大学、北海道大学、富山大学、東京外国語大学で非常勤講師をつとめる。